書　評

アンソニー・ギデンズ著　松尾精文・松川昭子訳

『親密性の変容
——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』

宮　本　孝　二

イギリスのブレア政権のブレーンとしても有名な、ケンブリッジ大元教授で1997年１月からＬＳＥ（ロンドン大学経済政治学院）の総長を務める社会学者ギデンズの92年の著作である。38年生まれのギデンズは71年の『資本主義と近代社会理論』を皮切りに、多くの著書を世に送り出して来たが、90年代にはいわゆるモダニティ論の連作を、90年の『近代とはいかなる時代か？モダニティの帰結』（訳書は93年、而立書房）、91年の『モダニティと自己アイデンティティ』、92年の『親密性の変容』、94年の『左右を超えて』と矢継ぎ早に刊行した。

ギデンズはモダニティの制度的特性の１つに反省的プロジェクトを挙げるが、『親密性の変容』で重要なのはそれである。意味づけの反省、意味の問い直しこそハイ・モダニティ（近代化の先端にある現在の高度なモダニティ）において可能となった。したがって性愛を媒介にしたインティミットな関係である親密関係の特性、すなわち親密性（インティマシィ）の意味も問い直される。モダニティにおいて親密関係の純粋関係化が進行し、新たな意味づけが必要とされるに至ったとギデンズは考える。純粋関係とは何らかの目的達成の手段としての関係ではなく、関係自体が目的となる社会関係であり、その関係自体に意味が見いだされなければ存続しえない。そして、意味の問い直しのなかで親密関係の民主化が進展し、それを一つの基盤として民主的な情緒的秩序をもつ社会の構築が可能になる。以上のような主旨の議論を、ギデンズは10章にわたっ

て展開する。

第1章「日々の実験、関係、セクシュアリティ」では、モダニティからハイ・モダニティへの変動過程において、性にかかわる意識や行為がどう変化したのか、そしてその変化をどう解釈するか、という問題設定がなされる。一生この人との関係を維持するよう運命づけられているというロマンティックな愛から、関係の意味を常に問い直しつつ維持する努力が必要な別の形態の愛への転換が見られるのであり、それがロマンティック・ラブからコンフルエント・ラブへの転換である。コンフルエント・ラブとは、固定的ではなく流動的な、別れては新たな出会いに合流していく愛なのである（翻訳では「ひとつに融け合う愛」となっているが後述するように誤解を招く訳である）。また、処女性やオナニーや同性愛についての社会的な評価や対応も変わり、処女性の尊重やオナニーに対する罪悪視は消えつつあり、同性愛はもはや変態とはみなされなくなりつつある。

第2章「フーコーのセクシュアリティ論」では、性愛の問題領域での現在の知的言説や思想を支配しているミシェル・フーコーの考え方に対する批判が展開される。現在見られる性にかかわる意識や行為の変容を解釈する際に、フーコー的な視点では愛の関係としての親密関係の特性を十分に把握できないというのである。

第3章「ロマンティック・ラブ等の愛着」では、恋愛の起源が近代初期にさかのぼり、そしてそれが恋愛結婚として結婚制度に結びついたことが述べられる。ロマンティック・ラブに基づく結婚は女性を家庭に押し込めることとなってしまったが、同時にまた対の関係の自律化をもたらした。経済的な男性優位が女性の抑圧をもたらしたことも否定できないが、そこでは親密関係が独自の社会関係として確立されていくことになったのも事実である。

第4章「愛情、自己投入、純粋な関係性」では、現在ロマンティック・ラブの成立基盤が揺らいでおり、愛の関係は成立しては壊れ、また新たに成立するという不安定な関係になってしまったことが示される。人々は対の関係、性愛

を媒介にして成立する親密関係を、日常的に絶えず努力して維持していかなければならない。とくに現在、女性は自立する力を獲得しつつあり、唯一の男性と永遠にというのではなく、絶えず問い直される愛の実現を求めて女性は生き始めたといえよう。コンフルエント・ラブの成立である。

それでは、以上のように変容した親密関係は人間にとってどのような意味をもつのだろうか。親密関係はいくつかの問題をはらんでもいる。それが第５章から第８章までの４つの章で検討される。

第５章「愛情やセックス等にたいする嗜癖」では、性愛は嗜癖の対象になることが指摘される。嗜癖とは依存症であり、性愛の嗜癖は強迫的に親密な他者を求め続ける。そのような嗜癖としての性愛が成立させる親密関係は、平等な情緒的な関係ではない。それは次々と相手を変え、一見したところコンフルエント・ラブのように真実の愛を求めているようにみえて、その内実は存在論的不安によって強迫されているにすぎないのである。自力で存在論的な安定を求めることを人々に要請する反省的プロジェクトがそれを強いるともいえる。反省的プロジェクトという困難な課題に対応できぬ人々は、多様な嗜癖にとらえられる。性愛にかかわる嗜癖もその一つの現れなのである。

第６章「共依存の社会学的意味」では、依存症候の別の現れとして共依存関係があることが示される。嗜癖としての性愛は、性愛そのものに依存するのであるが、共依存の場合は親密関係そのものに依存するのであり、しかも相互に依存し合うのである。親密関係への嗜癖は、親と子の関係にもありうる。その場合、親が子に対する関係に嗜癖することによって、いわゆる有害な親が現れる。子はその関係に強制的に組み込まれてしまう。その関係に性愛がからむとインセストにまで行き着くことがある。

第７章「心の迷い、性の悩み」では、女性の自律化に伴う親密関係の変容に際して、男らしさが危機に直面していることが指摘される。新しい親密関係は伝統的な男らしさの変換を迫っている。アイデンティティを揺るがされ危機に耐えられない男性は、ポルノへの嗜癖を強めたり、女性に対する暴力に向かう

可能性さえある。男性は本質的に不安に脅かされた存在であり、それを従来は経済的優位、仕事への依存、そして女性への一方的な情緒的依存で克服してきたが、新しい親密関係ではそうはいかない。男性こそ、より大きな存在論的課題に直面しているのである。

第8章「純粋な関係性のかかえる諸矛盾」では、真実の愛を求めるコンフルエント・ラブは、関係へのコミットメントをより必要とするが、意味の問い直しが強まるほど関係が不安定化し親密性が低下する可能性が強まらざるをえないことが指摘される。新しい親密関係が構成メンバー相互の経済的および心理的な自律性を伴うことも、関係の不安定化や親密性の低下を促進する要因となりうる。なお、純粋関係となりやすい同性愛的な親密関係に一時的なものが多く、次々に相手を変える傾向が強いことは、新しい親密関係の課題を示唆していると考えられる。

以上のように、親密関係を新たに構築していく際に解決を迫られている困難な問題があるが、さらにまた、新たな親密関係の構築に関連づけられた社会の構想が必要になっている。第9章「セクシュアリティ、抑圧、文明」では、性と文明の問題をフロイトや、それを批判的に継承したライヒやマルクーゼなどの思想を検討することによって考察し、性の解放を目指すそれらの性的ラディカリズムはフーコー同様、やはり愛についての議論を欠いていると批判する。性の解放は社会生活の情緒的再組織化につながらなければならないのに、それらの論者は性を愛や他者尊重から切り離しているのである。

そして最後の第10章「民主制としての親密な関係性」で、民主制としての親密性が、現代社会の民主化の基盤となることが示される。個人生活の民主化を基盤として、社会の民主化が実現するのであり、それが社会生活の情緒的再組織化である。民主的な関係は、相互に自律的で平等な個人によって可能となる。性愛を媒介にした社会関係である親密関係を民主的な関係として構築しうるパーソナリティをもった人間こそが、民主的な社会を形成しうるのである。モダニティのマクロな構造的条件のもとで展開される親密関係としての相互行為

ないし社会過程が、構造的条件に対して作用し返すというこの視点こそ、ギデンズの提唱する構造化理論が提起したものであり、ここにそれが鮮明に示されている。

また、本書全体を通して、自律と依存がキー概念になっており、ギデンズの構造化理論の基本特性であるパワーの中心性が現れていると言えよう。自律と依存は、ギデンズが構造化理論を構築する過程で重視してきたパワー関係の特性なのである。性愛を媒介にする親密関係が、女性の自律性の高度化、強化によって変容してきたというテーマを論じる中で、対等なパワー関係において初めて真の愛の関係が構築されうるのだとギデンズは主張する。親子関係や男性の反動についての指摘にも、パワー論の視点から興味深い問題、すなわち閉じられた場におけるパワーのもつ有害さ、衰退するパワーの兆しとしての暴力といった問題が含まれている。

パワー論としてはもう一つ、前述のようにフーコーの権力論との関連が見逃せない。そのキーワードはバイオ・パワーである。それは生物体としての個体のありかたを規制し形成する全域的に作用する権力を意味する。フーコーはバイオ・パワーを、近代に登場した権力が浸透した制度の一つの現れと見る。このような権力の社会のすみずみまでの全域的な作用に対して個人はどう対応しうるのか。フーコーは抵抗を唱えるが、それは全体性に対する個体性のはかない抵抗でしかありえないと見なすギデンズは、コントロールの弁証法という視点から、個人の意味づけパワー、アイデンティティ確立にかかわるパワーを見いだす。そこにこそ個人のパワーがあり、それはバイオ・パワーによって全面的に押さえ込まれるものではない。フーコーがバイオ・パワーによって主体が形成されてしまうと考えるところを、ギデンズは主体のアイデンティティ確立パワーによって主体形成が可能になると見なすのである。そして前述のように、相互のパワーのバランスがとれた自律的で平等な対の関係を形成することによって、あらたな社会関係、社会秩序を形成しうるという展望を開くのである。

以上のように、本書はきわめて広い視野のもとで、親密関係にかかわる論点を網羅し関連づけ、明解な展望を開いてくれる好著であり、読者を触発する豊かな可能性をもっているのだが、中心となる概念の訳語の問題と、本書への批判点とについて最後に簡単に触れておくことにしよう。

まず訳語の問題だが、コンフルエント・ラブを「ひとつに融け合う愛」とするのは誤解を招きやすい。「ひとつに融け合う愛」というならば、ロマンティック・ラブの方がふさわしい。その意識内容には融け合っているというイメージがあるからだ。しかし、コンフルエントという表現によって、出会っては反省的に検証され解体しさらにまた出会い、という繰り返しの意味が強調されている。コンフルエント・ラブは自律的な2人が対等に、したがって敢えて言うならば融け合わずに、親密関係を維持しようとする愛なのである。本文の説明にそれは明らかなため、読者が文脈を理解すれば大きく誤解はしないとはいえ、「ひとつに融け合う愛」という言葉が一人歩きし、訳語からの連想だけに頼ってギデンズのこの議論を理解してしまわないよう、十分な注意が必要である。

本書に批判されるべき点があるとすれば何であろうか。率直に言って評者には特に見当たらないのだが、他の論者はどうか。日本では、たとえば新しいフェミニズムの構築を目指す吉澤夏子が、その著書『女であることの希望』で、コンフルエント・ラブを正確に「出会いの愛」と訳しつつ、純粋関係やコンフルエント・ラブという視点を高く評価し、自らの議論の展開に活用しており、批判点は特に指摘されていない。

海外ではどうか。いくつかの書評には批判点が示されている。第一に、子どもや老人ないし親世代という、家族内における愛の対関係にとっての第三者は、ギデンズの指摘する新しい親密性が発展すればどう位置づけられるのかが明らかにされていないと批判されている。たしかに家族は子どもの養育や老人の介護に責任をもつ親族集団であるから、コンフルエント・ラブによってそのような親族集団の安定性は低下せざるをえない。また、女性の生活革命は子どもの養育への見通しなしには、子どもの誕生とともに挫折せざるをえないか、

女性に子どもの養育の責務を放棄せざるをえなくさせる可能性がある。重要な問題であるが、それは本書への内在的批判というよりは、本書以後の課題の指摘であろう。第二に、ギデンズの議論に親密性の変容の経済的社会的ないし文化的な基盤、すなわち階級性や文化特性の検討が欠落しているという批判がある。いかなる社会的経済的条件、文化的条件の下での親密関係なのかによって、親密性の変容のありかたも、それが直面する課題も異なるのではないかという指摘である。これももっともな指摘であるが、本書ではむしろそのような諸条件から相対的に自立した自律的な領域としての親密関係の特性を強調しているのであり、これもまた本書への内在的な批判とはなりえていない。第三に、パーソナリティ形成と制度変革の接合点が不明確であると批判されている。しかし、本書が示しているように、新たな親密関係において形成される特有のパーソナリティが制度の運営に携わることによって、この接合は可能になることではないだろうか。なお、フーコーの議論を支持する論者の批評も聞きたいところだが、管見するところでは見当たらない。

以上のように、本書への批判点はないわけではないが、セクシュアリティやジェンダーの問題をあくまで関係性の問題として把握しようとする視点は貴重である。ともすると個人的なアイデンティティ問題として語られがちなテーマであるが、個体を超えた対関係の問題として把握し、その独自な関係の問題に全体的な視野のもとで取り組んでいるところにこそ、本書の評価すべき点が見いだせよう。　　（而立書房、1995年７月、302頁、本体2,500円＋税）